

勝海舟と西郷隆盛

作家
星亮一



幕末日本を無血に導いた二人の胆識

勝海舟と西郷隆盛。誰もが知る江戸無血開城の立役者である。タイプの異なる二人だが、どのように自らを練り上げ、無血開城を成功に導いていったのか。「君子、時中す」そのものの行動をした二人の姿を、作家の星亮一氏に語っていただいた。

無血開城はなぜ成功したのか

「西郷におよぶことのできないのは、その大胆識と大誠意とにあるのだ。(中略)おれだつてことに処して、多少の権謀を用いないこと

もないが、ただこの西郷の至誠は、おれをしてあい欺くことができなかった。このときに際して、小齋浅略を事とするのは、かえってこの人のためにはらわたを見すかされるばかりと思つて、おれも至誠をもってこれに応じたから、江戸

城受け渡しも、あのとおり立談の間にすんだのだ」

江戸高輪にある薩摩藩屋敷において勝海舟と西郷隆盛の会談が行われたのは慶応四(一八六八)年三月十三、十四日。これによって

必要なのは幕府の軍隊ではない

勝は文政六(一八二三)年、江戸本所亀沢町の旗本の家に生まれました。父の小吉は酒や博打を好み随分豪放な生き方をした人だったようですが、半面、いまでいう教育ババで、幼い勝に剣術や禅に加え、近所の私塾で蘭学や英語を学ばせるのです。勝が海外に目を開かされたのはこの時でした。小吉の教育なしに、勝のその後の人生はなかったかもしれせん。やがてペリーが来航、幕府に開国を求めると、老中・阿部正弘は国内から広く海防に関する意見書を募ります。その時、阿部が高く評価したのが勝の意見書でした。晴れて長崎海軍伝習所への入門を許された勝は、語学に堪能だった

こともあり、伝習所の教監に抜擢されます。勝は長崎にいた三年四か月の間、日本は目まぐるしく変わっていました。「安政の大獄」により攘夷を叫ぶ人々が次々に投獄され、安政五(一八五八)年には日米修好通商条約が結ばれました。幕府はその批准書交換のためにアメリカに使節団を送ることにになり、勝はその護衛をする威臨丸の軍艦頭取という役職でサンフランシスコに派遣されるのです。

アメリカを見なくては何も始まらないと思つていた勝は、さぞ意気盛んであったろうと思われまじく、勝は出航前、あることを知って愕然とします。自分が艦長とばかり思つていたのに、上に軍艦奉行の木村喜毅がいたのです。木村の前職は長崎海軍伝習所監督

で、何かとやり合った仲でした。「幕府のやることは、すべてこうだ。勝はそう言つて周囲に当たり散らしたといわれます。」

その後の人生においても勝は何かに付け二番手が三番手の立場に置かれることが多くありました。幕府が困った時に登用され、それが終わるとホイと切り捨てられる——そういう運命に翻弄され続けたり人生でした。

帰国後、軍艦奉行並に出世を遂げた時こそそうでした。太平洋航海で自分の無力さを痛感した勝は、「いくら刀を差して大和魂を持ち込んでも、どこで荒波の太平洋を乗りこなすことはできない。士官だけでなく水夫、火焚、鍛冶、大工、あらゆる職種を結果しなくては軍艦の運航は無理」と幕府を説得。神戸に神戸海軍操練所を設立させます。そこでは、人物が優秀と見れば薩摩や土佐、長州の藩士たちでも受け入れて教育するのが勝のやり方でした。

幕府のための海軍に留まらず、よりグローバルな視野で日本国海軍を目指すという勝の見識に心酔した土佐の坂本龍馬が入門したのもこの頃です。長い目で見れば、

西郷率いる官軍(新政府軍)は江戸城総攻撃を中止し、幕府は江戸城を明け渡すことが決まりました。いわゆる江戸城無血開城です。会談は密室で行われたので、どのようなやりとりがあったのか、ヴェールに包まれたままですが、この勝海舟の言葉から推測すると、無血開城を決するまでにさほど時間は要しなかったことが分かります。勝と西郷はもとも旧知の仲で、その力量を賞賛し合う間柄でした。日本の命運を決するこの瀬戸際の交渉が成功したのは、知略を超えた二人の信頼と卓越した人間性、そして日本の未来を見据えた慧眼によるところが大きかったことは間違いありません。

理論家で一匹狼の勝、一方の西郷は剛胆で人並み外れたリーダーシップの持ち主でした。タイプは異なるものの、それぞれの強みが生かされてこの無血開城を成し遂げられたところに、歴史の面白みがあるように思います。

本欄ではそれぞれの足跡を辿りながら、二人がいかに新しい時代の風を読み、将来の日本のために奔走していったかを見つめていきたいと思つています。

勝の考えは実に正鵠を射たものでした。しかし幕府の保守派がこれを快く思うはずはありません。

勝が恐れていたことが起きたのは、そういう時でした。海軍操練所の一人が尊皇攘夷運動に関わり、池田屋事件で新撰組に殺されたのです。時を同じくして長州藩が京都に攻め入る蛤御門の変が勃発し、それは薩摩・会津連合軍による長州藩撃退、さらに幕府の長州征伐へと発展していきました。

勝は江戸への引き揚げを命じられ、操練所は廃止に追い込まれてしまいます。幕府はこの時とばかり、勝が考えた日本国海軍の建設構想をぶち壊してしまつたのです。勝は泣くに泣けない思いだったに違いありません。

勝が大坂で初めて西郷に会ったのは、そういう苦境に喘いでいた元治元(一八六四)年九月のことです。この時、西郷は薩摩藩の留守居役でした。

勝は西郷の前に盛んに国防を論じながら、「今日の混乱を乗り切るには諸大名を集めて国論をまとめ、帝に奏上するのがよい」ともはや幕府は末期症状だ。一度潰れたほうが日本のためだ」と得意の弁舌で、

特集 君子、時中す



勝海舟

かつ・かいしゅう—文政6(1823)年~明治32(1899)年。長崎海軍伝習所に学ぶ。万延元(1860)年咸臨丸艦長として渡米。元治元(1864)年軍艦奉行に就任。神戸に海軍操練所を開き、幕田のほか坂本龍馬ら諸藩の学生、志士を教育。戊辰戦争では西郷隆盛を説得し、江戸城の無血開城に成功。新政府で海軍大輔などを歴任。



西郷隆盛

さいごう・たかもり——文政10(1828)年～明治10(1877)年。鹿児島藩主島津斉彬に取り立てられる。安政の大獄と斉彬の死を契機に人水自殺を図る。その後、島津久光と衝突し配流。召還後、第一次長州征討では幕府側の参謀として活躍。以後、討幕へと方向転換をはかり、薩長連合を結ぶ。勝海舟とともに江戸城無血開城を実現し、王政復古のクーデターを成功させた。新政府内でも参謀として活躍するが、西南戦争で敗北し自刃した。

二人の人生を考える時、私は臨終時の言葉にそれが凝縮されているように感じます。勝は明治三十二(一八九九)年一月、風呂上がりにプランデーを

新しい時代を眺み、打つべき手を打ちながら果敢に生きた勝と西郷。二人の生き方は混沌の社会を生きる私たちに大きな示唆を与えてくれています。

勝と西郷はタイプは異なるものの、お互いに魂が共鳴し合う仲でした。例えば、既成概念にとらわれない部分です。

勝と西郷に学ぶべき姿勢

いづれにしても西郷は「明日江戸を発って総督府へ出向き協議いたす。官軍側の結論が出るまで、江戸城攻撃は延期する」と告げて会談は終結。江戸の百五十万人の命は救われたのです。

ただ、最後の決断力という点では、やはり西郷が一枚も二枚も上手だったようです。司令官として独立集団を率いて戊辰戦争や西南戦争を戦った西郷に対して、勝は実際の軍事行動の先頭に立つことはありませんでした。徳川慶喜に

慶喜の命で長州戦争の後始末に行った時、軍艦奉行だった勝は誰一人お供を付けずに単身、広島宮島に向かいました。これに拍子抜けしたのは長州勢です。お互いに身構えることなくさっさとばらんな雰囲気の中で話をまとめ上げるのですが、これも勝の計算し尽くされた交渉術でした。これは誰にもできないことではありません。一つ間違えば命を失う行為であり、勝は常に捨てる覚悟で生きていたのです。

二人の人生を考える時、私は臨終時の言葉にそれが凝縮されているように感じられます。勝は明治三十二(一八九九)年一月、風呂上がりにプランデーを

が獲得すれば、賠償金と釣り合う金額になる——そういう二人の計算があったのではないのでしょうか。会津戦争の際、会津藩が幕府に再三支援を要請したにもかかわらず勝が最後まで無視し続けたのは、その論拠の一つです。

勝が幕府だけでは本場の軍隊は編成できないとして薩摩、長州、土佐などから幅広い人材を確保しようとしたように、西郷もまた必要とあれば、肌が合わない相手でも協力すべきところは協力し事態を打開する柔軟性がありました。

仕える幕臣であり、かつては高額の資金を投じて渡米させてもらった恩義がある以上、どうしても自分の行動にブレーキがかかっていたのでしよう。

一口飲んで、そのまま意識を失ってしまいます。この時、傍にいた妹の順子が聞いたのが「これでおしまい」という最後の言葉でした。生涯人を食いながら、晩年は飄々と生きた、いかにも勝らしい言葉だと思えます。波瀾万丈の七十七年の人生を、この短い言葉で潔く終結させたのでしよう。

勝もまた斉彬には少なからぬ影響を受けています。勝が威臨丸で航海に明け暮れていた頃、斉彬は薩摩藩の南端にある山川港に勝を訪ねたことがありました。勝の独自の考えは、海防の知識は右に出る者はいないとされた斉彬をも感服させ、後に斉彬は勝に「立派な艦長だ」と認めた書簡まで送っています。

勝が幕府だけでは本場の軍隊は編成できないとして薩摩、長州、土佐などから幅広い人材を確保しようとしたように、西郷もまた必要とあれば、肌が合わない相手でも協力すべきところは協力し事態を打開する柔軟性がありました。

勝もまた斉彬には少なからぬ影響を受けています。勝が威臨丸で航海に明け暮れていた頃、斉彬は薩摩藩の南端にある山川港に勝を訪ねたことがありました。勝の独自の考えは、海防の知識は右に出る者はいないとされた斉彬をも感服させ、後に斉彬は勝に「立派な艦長だ」と認めた書簡まで送っています。

勝もまた斉彬には少なからぬ影響を受けています。勝が威臨丸で航海に明け暮れていた頃、斉彬は薩摩藩の南端にある山川港に勝を訪ねたことがありました。勝の独自の考えは、海防の知識は右に出る者はいないとされた斉彬をも感服させ、後に斉彬は勝に「立派な艦長だ」と認めた書簡まで送っています。

二度の島流しで自分自身を磨く

その西郷は、勝に遅れること五年、文政十(一八二八)年、薩摩藩の下級武士の子として生まれました。西郷は幼い頃から、藩独自の郷中教育によって勉学や武術を学び、武士としての生き様を徹底して仕込まれていきました。

西郷が海外に関心を抱いたのは開明派大名として知られた藩主・島津斉彬の影響でした。安政元(一八五四)年、西郷は庭方役として直接、斉彬に相まみえるようになり、その縁で水戸学の藤田東湖などの薫陶を受けるようになるのです。

西郷にとつて斉彬のような名君に仕えたことは、時流を読む眼を養うとともに、大きな誇りにもなっていたようです。命を受けた西郷は、一橋慶喜擁立による幕府の体制つくりと開国、富国強兵という斉彬の計画のために奔走するのです。

西郷にとつて斉彬のような名君に仕えたことは、時流を読む眼を養うとともに、大きな誇りにもなっていたようです。命を受けた西郷は、一橋慶喜擁立による幕府の体制つくりと開国、富国強兵という斉彬の計画のために奔走するのです。

無血開城で何が話し合われたか

さて、話は無血開城に戻ります。江戸攻撃を強行せんとする西郷率いる官軍が静岡の駿府にまで追った時、軍事総裁である勝はかねて知る西郷の懐の深さにすべてを賭け、江戸を戦火から守ろうと決断しました。そこで、幕臣の山岡鉄太郎に書簡を託して駿府に走らせました。駿府に着いた山岡は、すぐさま西郷への会見を求めて勝の書簡を手渡し、徳川慶喜への寛大な処置を請います。西郷はこれを知り、ここにトップ会談の糸

件が整うのです。先述のとおり、密室会談の具体的な内容は謎のままですが、いざ決裂すれば、官軍を迎え撃つ勝もまた江戸を焦土にし軍艦で総攻撃を仕掛けて戦う構えでした。論戦を交えなくとも、激しい精神的闘争の迫り合いがあったことは確かです。しかし、勝の恭順論を理解した以上、無用な流血は回避したいというのが西郷の思いでした。「江戸では戦争はできない」という心の内をお互いに分かっていたのです。ここからは推察ですが、私はここで賠償金についても話し合われたのではないかと考えます。薩長軍は莫大な費用をかけて軍備拡張を進めてきました。問題はその借金をどうするかです。幕府も大赤字で金庫は空。そこで勝は奥州の富と領地をさりげなく西郷に差し出そうとしたのではないかと、というのが私の見方です。

西郷が海外に関心を抱いたのは開明派大名として知られた藩主・島津斉彬の影響でした。安政元(一八五四)年、西郷は庭方役として直接、斉彬に相まみえるようになり、その縁で水戸学の藤田東湖などの薫陶を受けるようになるのです。勝もまた斉彬には少なからぬ影響を受けています。勝が威臨丸で航海に明け暮れていた頃、斉彬は薩摩藩の南端にある山川港に勝を訪ねたことがありました。勝の独自の考えは、海防の知識は右に出る者はいないとされた斉彬をも感服させ、後に斉彬は勝に「立派な艦長だ」と認めた書簡まで送っています。

西郷にとつて斉彬のような名君に仕えたことは、時流を読む眼を養うとともに、大きな誇りにもなっていたようです。命を受けた西郷は、一橋慶喜擁立による幕府の体制つくりと開国、富国強兵という斉彬の計画のために奔走するのです。

西郷にとつて斉彬のような名君に仕えたことは、時流を読む眼を養うとともに、大きな誇りにもなっていたようです。命を受けた西郷は、一橋慶喜擁立による幕府の体制つくりと開国、富国強兵という斉彬の計画のために奔走するのです。

西郷にとつて斉彬のような名君に仕えたことは、時流を読む眼を養うとともに、大きな誇りにもなっていたようです。命を受けた西郷は、一橋慶喜擁立による幕府の体制つくりと開国、富国強兵という斉彬の計画のために奔走するのです。